

# 大学生の家族形成観

入江 和夫・藤井百合子\*・三宅 宏枝\*\*

University Students' View of Family Formation

IRIE Kazuo, HUIJI Yuriko\*, MIYAKE Hiroe\*\*

(Received December 7, 2009)

キーワード：家族関係、衣食住、結婚面、家庭科

## はじめに

大学生は将来、いまある家族から離れ、結婚し、新しい家庭を築く。しかし、日本には大きな課題が存在している。それは未婚化の進行である。女性20代後半では、1970～2000年の間に未婚率は18%から54%に、男性30代前半では同じ時期に12%から43%に増えている。結婚している人の減少に伴って出産も減っている。わが国の出生率は1971年～2003年の間に2.16から1.29となって減少している。この数値は長期的に人口を維持できる水準の2.07より低く、その結果、わが国は人口の減少化が始まり、高齢化の進行が指摘されている（国立社会保障・人口問題研究所HP）。

高等学校学習指導要領「家庭」（文部科学省 2009）は「家族・家庭の意義や家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させ、男女が協力して家庭を築くことの重要性について認識させる。」と記載されている。この文言は誰もがいつかは結婚して、家庭を築くという前提の上に成り立っている感がある。家庭科教育として未婚化や晩婚化の課題に対応するために結婚の関心を高めることが必要である。家庭科の内容は中学校学習指導要領（文部科学省 2008）に見られるように「衣食住」と「家族関係」に分類できる。前者は自立のための生活力であり、後者は人間関係を円滑にする力である。果たして、大学生はこれらの教科内容を未来の「結婚」に役立つものとして意識しているのだろうか。結婚とは新たな家族の形成である。結婚相手に求めようとする条件として経済、健康、容姿などが考えられるが、その中でも家族や他者との人間関係は大きな要因だと考えられる。

そこで、「家族形成観」及び家庭科学習意欲との関わりを明らかにするとともに、今後の家庭科教育のありかたを一考した。

## 方法

### 1 調査対象者 山口大学教育学部 教科教育法受講者（2年生）

\* 世田谷区立瀬田小学校 \*\* 東京都三鷹市役所

111名（男38名、女73名）

- 2 調査時期 2008年 11月
- 3 質問紙を授業中に配布し、その場で回収した。
- 4 調査項目：4段階（1＝全くない、2＝あまりない、3＝ややある、4＝非常にある）

## 結果と考察

### 1. 家族形成観

家族形成に関する設問項目を主因子法によって、因子分析した結果を表1に示した。

表1 家族形成観尺度の因子分析結果（主因子法、バリマックス回転後の因子行列）

項目 <sup>1)</sup>	因子1	因子2	因子3
Q家族とよく話す	0.853	0.112	0.03
Q家族は自分の気持ちをわかってくれる	0.787	0.145	0.112
Q実家にいる時、ホッとできる	0.74	0.112	0.033
Q家族は礼儀やマナーを教えてくれる	0.485	0.124	0.137
Q結婚に関心がある	0.179	0.755	0.35
Q結婚はなるべく早い時期にしたい	0.066	0.677	0.037
Q結婚について学びたい	0.225	0.547	0.116
Q異性と楽しく話ができる	0.184	0.034	0.638
Q責任感が強い	0.085	0.017	0.553
Q友人関係で気を遣うことがある	-0.086	0.164	0.48
Q人に対して思いやりがある	0.094	0.178	0.449
分散の%	20.60%	13.10%	12.00%
信頼性分析 $\alpha$ =	0.818	0.726	0.62

1) 4段階：1＝全くない、2＝あまりない、3＝ややある、4＝非常にある

各因子のネーミングについて因子1は家族との絆に関することであり、「家族との人間関係力」とした。因子2は結婚に関することであり、「結婚の関心」とした。因子3は異性や友人に関することであり、「他者との人間関係力」とした。回転後の累積寄与率は45.7%であり、各因子の信頼性分析 $\alpha$ は0.6以上であることから、この括りでよいことがわかった。

上記の3つ因子にまとめられる「家族形成観」は家庭の中で培われるものと考えられる。「家族との人間関係力」は両親や兄弟との関係を通して、また「他者との人間関係力」はこれが土台となって生まれ、やがて「結婚への関心」を高めていくと考えられる。これらの因子を経時的に考えてみれば「家族との人間関係力」→「他者との人間関係力」→「結婚の関心」の順ほど新しい。

各因子の下位尺度の平均値を求め、因子得点とした。性別による因子得点平均の違いを調べ、表2に示した。

表2 家族形成観の男女別因子得点

因子得点の平均値	男(n=38)	女(n=73)	有意差 <sup>1)</sup>
家族との人間関係力	3.26	3.31	n.s.
結婚の関心	2.81	3.06	n.s.
他者との人間関係力	2.93	2.98	n.s.

1) t検定 n.s. 有意差なし

「家族との人間関係力」の平均値は男子で3.26, 女子で3.31であり、有意差はなかった。「結婚の関心」の平均値は男子で2.81, 女子で3.06であり、有意差はなかった。「他者との人間関係力」の平均値は男子で2.93, 女子で2.98であり、有意差はなかった。以上のことから、大学生の男女による「家族との人間関係力」「他者との人間関係力」「結婚の関心」は同程度であることがわかった。

## 2. 「家族形成観」と「家庭科学習意欲」について

家庭科はよりよい家庭生活の工夫を目指して衣食住や家族関係などを学ぶ教科である。

そこで「家庭科学習意欲」と「家族形成観」の関わりや因果関係を明らかにすることにした。

### 2-1 相関

小学校5年から家庭科の学習は始まる。家庭科の「衣食住学習意欲」「家族関係学習意欲」項目と「家族形成観」（＝「家族との人間関係力」「他者との人間関係力」「結婚の関心」）の関わりはどのようになっているのであろうか、相関関係をあきらかにし、表3に示した。

表3 「家族形成観」と「家庭科学習意欲」との相関

	衣食住学習意欲	家族関係学習意欲	家族との人間関係力	結婚の関心	他者との人間関係力
衣食住学習意欲	1	.328(*)	0.288	.463(**)	0.089
家族関係学習意欲	.466(**)	1	.401(*)	.569(**)	.490(**)
家族との人間関係力	0.208	0.135	1	.353(*)	.452(**)
結婚の関心	.337(**)	0.114	.285(*)	1	.346(*)
他者との人間関係力	0.007	.260(*)	-0.028	0.228	1

\* 相関係数は 5% 水準で有意(両側)です。

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意(両側)です。

a 男(n=38)→上部、女(n=73)→下部

男子では「衣食住学習意欲」は「家族関係学習意欲」と「結婚の関心」と正の相関があった。「家族関係学習意欲」は「家族との人間関係力」と「他者との人間関係意欲」と「結婚の関心」に正の相関があり、「家族との人間関係力」は「結婚の関心」と「他者との人間関係意欲」に正の相関があった。

女子では「衣食住学習意欲」は「家族関係学習意欲」と「結婚の関心」と正の相関があり、男子と同様であった。一方「家族関係学習意欲」は「他者との人間関係意欲」とのみ正の相関があり、男子と異なった。「家族との人間関係力」は「結婚の関心」のみ正の相関があった。

「結婚の関心」に注目すれば、男子は「衣食住学習意欲」「家族関係学習意欲」「家族との人間関係力」「他者との人間関係意欲」の全項目と関わりがあるのに対し、女子は「衣食住学習意欲」「家族との人間関係力」だけに正の相関があり、男子に比べれば相関

する項目が少なかった。

## 2-2 因果関係

最も時間的に古い「家族との人間関係力」を土台に「結婚の関心」をゴールとして、残りの項目をこれらの間に置くモデルを考えた。また、家庭科の内容である「衣食住学習意欲」「家族関係学習意欲」が「結婚の関心」に集約するように、AMOSによってパス解析を行い、その結果を図1, 図2に示した。

### 2-2-1 男子について

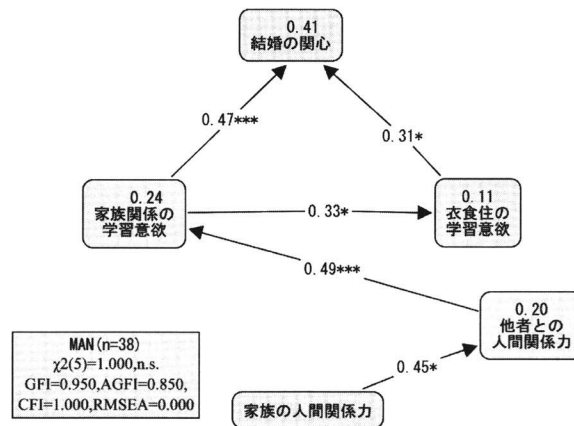


図1 男子の「結婚の関心」

男子では「家族との人間関係力」が豊かになることによって「他者との人間関係力」は大きくなり、これが大きくなれば、「家族関係の学習意欲」は高まる。この意欲は「結婚の関心」を高める直接的な要因であり、なおかつ「衣食住の学習意欲」を経由して「結婚の関心」を高める要因ともなっている。「結婚の関心」に注目する。「家族関係の学習意欲」と「衣食住の学習意欲」の2方向のパスから41%説明できる。「家族関係の学習意欲」→「結婚の関心」の影響（パス係数 $0.47+0.33 \times 0.31=0.57$ ）は「衣食住の学習意欲」→「結婚の関心」に比べ（パス係数 $0.31$ ）約2倍大きかった。換言すれば、男子の場合、「結婚の関心」を高める効果は「衣食住」より「家族関係」の学習の方が大きな影響があることがわかった。

家庭教育として「家族との人間関係力」は「結婚の関心」に直接には影響を与えず、家庭科の学習を経由していた。その影響力は $0.45 \times 0.49 \times 0.47+0.45 \times 0.49 \times 0.33 \times 0.31=0.106$ であり、女子（0.23）に比べ少ないことがわかった。

## 2-2-2 女子について

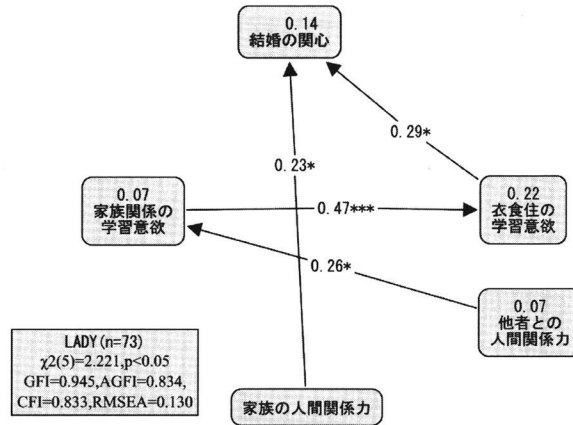


図2 女子の「結婚の関心」

女子の「結婚の関心」の重相関係数は0.14であり、2つの要因から14%説明できる。家庭科の学習に注目すると、女子の「衣食住の学習意欲」→「結婚の関心」の影響力(パス係数0.29)は、男子(パス係数0.31)と同程度であった。「家族関係の学習意欲」→「結婚の関心」の影響力(パス係数 $0.47 \times 0.29 = 0.136$ )は男子(パス係数0.57)と違って「衣食住の学習意欲」を経由し、少なかった。

家庭教育に注目すると、女子の「家族との人間教育力」→「結婚の関心」の影響力(パス係数0.23)であり、男子と違って直接、前者は「結婚の関心」に影響していた。すなわち、家族とよく話す、家族は自分を理解してくれる、ホッとするなど安定感のある家族によって得られる「家族の人間関係力」が「結婚の関心」を高めていた。

## 3. 「家族形成観」のタイプ化

「家族形成観」因子得点による集団の分類を階層クラスタ分析によって行った。WARD法「平方ユークリッド距離」で行い、Rescabd Distance Cluster Combineが13で、4タイプの集団が得られた。各タイプによる「家族形成観」因子得点の平均値をグラフ化し、図3に示した。

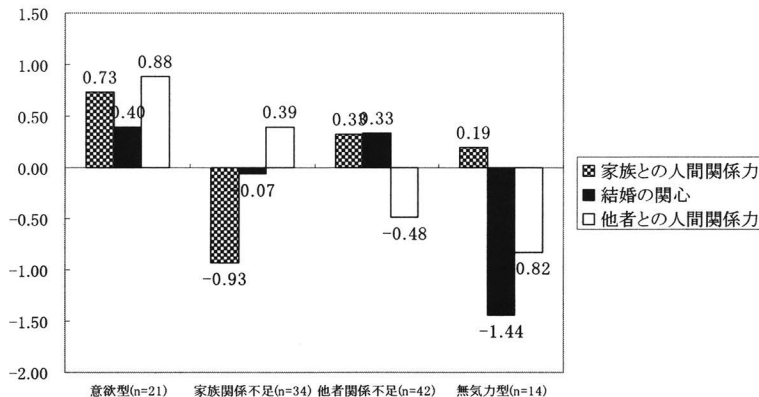


図3 「家族形成観」のタイプ

「家族形成観」は前述のとおり「家族との人間関係力」「他者との人間関係力」「結婚の関心」から構成されている。それらが全てポジティブな集団を家庭建設の「意欲型」(clu1/21名)とネーミングした。一方、「家族関係不足型」(clu2)34名、「他者関係不足型」(clu3)42名、「無気力型」(clu4)14名となった。

#### 4. 「家族形成観」タイプの特徴

「家族形成観」のタイプ別による「結婚相手に求める性格」「結婚のよい面」「離婚」「家庭科学習意欲」についての違いを一元分散分析によって明らかにした。

##### 4-1 「結婚相手に求める性格」

「結婚相手に求める性格」について、「家族形成観」タイプ別の平均値を比較した結果を表4に示した。

表4 「家族形成観」タイプ別「結婚相手に求める性格」

結婚相手に求める性格	平均値				有意差 <sup>1)</sup>
	意欲型 clu1(n=21)	家族関係不足型 clu2(n=34)	他者関係不足型 clu3(n=42)	無気力型 clu4(n=14)	
Q人間性がいい	3.9	3.71	3.62	3.64	n.s.
Q共通する趣味がある	3.38	3	2.83	2.79	1/3(*)
Q一緒にいると楽しい	3.9	3.82	3.88	3.86	n.s.
Q自分の親のことを気遣ってくれる	3.57	2.91	3.31	2.71	1/2(*),1/4(*),3/2(*),3/4(*)
Q必要以上に干渉しない	3.1	2.85	3.02	2.86	n.s.
Q子どもを持つ持たないの考えが一致する	3.57	3.41	3.57	2.71	1/4(*),2/4(*),3/4(*)
Q現在の自分の仕事を尊重してくれる	3.76	3.44	3.5	3.14	1/4(*)
Qものごとの価値観が一致している	3.62	3.35	3.26	3.21	n.s.

1) 1元分散分析 \*p<0.05, \*\*p<0.01, n.s.=有意差なし

家庭形成の「意欲的型」と「無気力型」との平均値(=「意欲的家庭建設型」/「結婚無関心型」)の違いに絞って注目する。「意欲型」の方が「自分の親のことを気遣ってくれる」(平均値=3.57/2.71)相手を、「子どもを持つ持たないの考えが一致する」(平均値=3.57/2.71)相手を、「現在の自分の仕事を尊重してくれる」(平均値=3.76/3.14)相手をより求めていることがわかった。

##### 4-2 「結婚のよい面」

「結婚のよい面」について、「家族形成観」タイプ別の平均値を比較した結果を表5に示した。

表5 「家族形成観」タイプ別「結婚のよい面」

項目 <sup>1)</sup>	平均値				有意差 <sup>2)</sup>
	意欲型 clu1(n=21)	家族関係不足型 clu2(n=34)	他者関係不足型 clu3(n=42)	無気力型 clu4(n=14)	
Q社会的な信用が増す	2.86	2.44	2.55	2.29	n.s.
Q精神的に安定する	3.76	3.35	3.29	2.71	1/3(*),1/4(*),2/4(*),3/4(*)
Q親から自立できる	3.29	2.85	2.76	2.14	1/4(*),2/4(*)
Q食生活などの暮らしが充実する	3.57	2.88	2.86	2.64	1/2(*),1/3(*),1/4(*)
Q愛する人と暮らせる	3.86	3.59	3.6	3.36	n.s.
Q経済的にゆとりが持てる	3	2.76	2.64	2.36	n.s.
Q子どもを持つことができる	3.86	3.47	3.6	3	1/4(*),3/4(*)
Q暮らしが充実する	3.95	3.41	3.38	3.07	1/2(*),1/3(*),1/4(*)

1) 4段階: 1=全くない、2=あまりない、3=ややある、4=非常にある

2) 1元分散分析 \*p<0.05, n.s.=有意差なし

「意欲型」と「無気力型」との平均値（＝「意欲的家庭建設型」/「結婚無関心型」）違いに絞って注目する。結婚のよい面として「意欲型」の方が「精神的に安定する」（平均値＝3.78/2.71）、「親から自立できる」（平均値＝3.29/2.14）、「食生活などの暮らしが充実する」（平均値＝3.57/2.64）、「子どもをもつことができる」（平均値＝3.86/3.00）の意識が高かった。特に注目すべき点は「無気力型」の「親から自立できる」は「あまりあてはまらない」と否定的に考えていることである。家庭科の目標の一つは生活の自立である。このことを家庭建設の観点から意味づけることが今後、重要だと考えられる。

#### 4-3 「離婚」

離婚率は高い傾向にある。ここでは「家族形成観」タイプ別の平均値を比較した結果を表6に示した。

表6 「家族形成観」タイプ別「離婚」

項目 <sup>1)</sup>	平均値				有意差 <sup>2)</sup>
	意欲型 clu1(n=21)	家族関係不足型 clu2(n=34)	他者関係不足型 clu3(n=42)	無気力型 clu4(n=14)	
Q家庭崩壊について学びたい	3.29	2.85	2.93	2.36	1/4(**)
Q結婚しなくても十分に幸せな人生をおくことができる	2.57	2.62	2.4	3.07	4/3(*)
Q離婚は一つの経験であり、人生にとってマイナスにはならない	2.67	2.65	2.45	2.5	n.s.

1) 4段階: 1=全くない、2=あまりない、3=ややある、4=非常にある

2) 1元分散分析 \*p<0.05, \*\*p<0.01, n.s.=有意差なし

「家庭崩壊について学びたい」について「意欲型」（平均値＝3.29）は「無気力型」（平均値＝2.36）よりもこのことを学習したいと考えている。結婚の破綻がどういふところにあるのかを事前に学習しておくことも結婚生活を円滑に進めるのに必要であると考えているのではないだろうか。「結婚しなくても十分に幸せな生活を送ることができる」について、「無気力型」（平均値＝3.07）の方が「他者関係不足型」（平均値＝2.57）に比べ、そのように考えている。「離婚は一つの経験であり、人生にとってマイナスにならない」には有意な差は見られなかった。

#### 4-4 「家庭科学習意欲」

家庭科は今の自分や家族の生活をよりよくするためだけでなく、将来の家庭建設に向けても必要な教科であり、意欲的な学習が期待される。ここでは「家族形成観」タイプ別の平均値を比較した結果を表7に示した。

表7 「家族形成観」タイプ別家庭科学習意欲

項目 <sup>1)</sup>	平均値				有意差 <sup>2)</sup>
	意欲型 clu1(n=21)	家族関係不足型 clu2(n=34)	他者関係不足型 clu3(n=42)	無気力型 clu4(n=14)	
Q家族関係に関する学習をしたい	3.57	3.29	3.19	2.71	1/4(**), 2/4(*)
Q衣食住の知識や技能に関する学習をしたい	3.29	3	3.19	2.57	1/4(*), 3/4(*)

1) 4段階: 1=全くない、2=あまりない、3=ややある、4=非常にある

2) 1元分散分析 \*p<0.05, \*\*p<0.01, n.s.=有意差なし

家族関係及び衣食住の知識や技能に関する学習について、「意欲」型の平均値はそれぞれ3.57、3.29であるが、「無気力」型では2.71、2.57となり、前者の学習意欲の方が高かった。

## まとめ

大学生の「家族形成観」について、次のことが明らかとなった。

- 1) 「家族形成観」の構造は因子分析（主因子法）によって、因子1「家族との人間関係力」（ $\alpha=0.816$ ）、因子2「結婚の関心」（ $\alpha=0.726$ ）、因子3「他者との人間関係力」（ $\alpha=0.62$ ）であり、累積寄与率は45.7%であった。
- 2) 各因子得点の性別の違いは見られなかったことから、男女の「家族形成観」の意識は同程度であった。
- 3) 男女別の家庭科学習意欲（＝「家族関係の学習意欲」「衣食住の学習意欲」）との相関を求め、AMOSによるパス解析を行った結果、「結婚の関心」の高まりは男子では家庭科の「家族関係の学習意欲」「衣食住の学習意欲」の2つが影響し、パス係数から前者による影響の方が大きいことがわかった。女子では家庭科の「衣食住の学習意欲」と家庭教育の「家族との人間関係力」の2つが同程度の影響力を示した。
- 4) 因子得点（平均値ではない）を用いたクラスタ分析（＝階層クラスタ分析、WARD法「平方ユークリッド距離」の結果、「家族形成観」タイプは「意欲型」（21名）、「家族関係不足型」（34名）「他者関係不足型」（42名）「無気力型」（14名）に分類できた。
- 5) 「家族形成観」タイプの「意欲型」は「結婚相手に求める性格」に関して「自分の親のことを気遣ってくれる」ことを望む意識が高く、「結婚のよい面」に関して「精神的に安定する」「親から自立できる」「食生活などの暮らしが充実する」「子どもをもつことができる」の意識が高かった。また「離婚」に関して「Q家庭崩壊について学びたい」意識が高かった。

以上のことから、今後の家庭科教育について一考する。パス解析では性別による大きな違いがあった。この結果を利用し「結婚の関心」を高めなければならない。男子では「結婚の関心」は家庭科の学習意欲によって高まり、それは「他者との人間関係力」によって高まり、この力は「家族との人間関係力」によって高まることから、家庭科は結婚を視野に入れた内容にするとともに家庭にフィードバックすることが重要である。女子では家庭科の「衣食住の学習意欲」だけが直接「結婚の関心」を高めていたことから、その内容を結婚と絡めて意識化させることで、さらに関心が高めるものと考えられる。結婚後、子どもと両親との不和、介護殺人など家族に関わる事件は急増している。このことから、家庭科の「家族関係」の学習は重要であり、女子には意識化させなければならない。家族形成「意欲型」は結婚のよい面を精神的に安定する、子どもをもつことができると考えている。未婚化に対応する家庭科の具体的内容の焦点はここにある。精神的に安定が得られる家族づくりや子どもをもつことの喜びが結婚のよい面だと捉えられるような家庭科に向けた教材を開発を行う必要がある。

## 参考文献

- 国立社会保障・人口問題研究所HP <http://www.ipss.go.jp/syoushika/>  
文部科学省（2009）：高等学校学習指導要領「家庭」：<http://next.go.jp>  
文部科学省（1998）：中学校学習指導要領解説「技術・家庭」編，（教育図書）